平成 14 年度 EEC フレンドシップシンポジウム
「デジタル情報で自然体験支援」

平成 15 年 2 月 15 日、宮城教育大学にて標記のシンポジウムを実施した。

シンポジウムでは、事業担当者である伊沢紘生・見上一幸・溝田浩二が 3 つの実践報告を行った。実践の詳細については、本報告書に示した通りである。また、ホームページを利用した自然体験学習支援について、仙台市科学館の中澤堅一郎氏と宮城教育大学 EEC の鵜川義弘から、実践の例が報告された（次頁参照）。中澤氏は科学館のホームページがどのように科学館の活動と連動しているか、学校ではどのようにホームページを利用した学習を行うことができるか、詳細にご説明をいただいた。一方、鵜川氏からは、EEC における直接体験を支援する目的で試作を行ったホームページについての紹介が行われた。

ホームページを利用した自然体験学習支援については、直接体験を補うための各種のツールが提示されたが、これをフレンドシップ事業にどのように活用していくべきか、といった発展的な議論まではつなげることができなかった。個別教官による考え方の違い、事業規模による時間的制限などがあり、いちがいに事業に情報教育までを含めることが不可能であると感じられた。本事業は一年のうちの前半を使って行われる講義科目の 1 つとしてなりたっており、直接体験支援のための演習に非常に長い時間を使わざるを得ない側面がある。受講学生の負担を増やすことなくこのようなバックグラウンドからの支援を講義に取りいれることはそれほど簡単ではないだろう。事業としてのフレンドシップには限界があり、限られた時間の中で成立させるには、授業の狙いを極端に絞り込まなければならないのである。しかし、フレンドシップ事業の成果を検証し、また普及していくという意味合いからは、ホームページの中で率先して活動を紹介していくべきであり、今後は各実践においてそれを検討する、といったことが話し合われた。また、現実の授業としてではなく、「フレンドシップ事業精神」を追求する立場からは、情報ツールによる自然体験支援というテーマをどのようにフレンドシップ事業のなかに定義づけるべきなのか、考えさせられた時間でもあった。（斉藤千映美）